

自己肯定感を高める授業づくり —道徳と算数の実践を通して—

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域
鈴木 詩織

1 主題設定の理由

1年半のサポーター活動と2回の教師力向上実習を通して、連携協力校特有の課題や、目の前の子どもの教師としてどう働きかけるべきか、という実践的な学びを行えたのは、確実に自分の力になっていると感じている。また、板書計画や授業づくりなど教師になるまでに高めておきたい課題も、多く認識することができた。さらに、自分の追究課題を定めることができ課題解決に向けて取り組むという実践ができたのは、大きな財産となった。

私は教師になった時、子どもが安心して過ごすことができ、成長し合う場となる学級経営を行っていきたくと考えている。サポーター活動を通して、友達ではなく先生にくっついて行動する子、「できない」「わからない」と何事に対しても自信がない子、友達の言動を気にしてトラブルを起こしてしまう子など、自己肯定感の低い子どもたちが少数ながらいることが分かった。そのような子どもたちは、教室で安心して過ごすことができている。今後自分が学級経営を行う際、自己肯定感を低い子どもたちとどのように関わっていくかが自分の教師力の向上に繋がると考え、どのように子どもの自己肯定感を高めていくかを追究することとした。全員がそのような過ごせる学級を運営するには、学級経営の視点だけでは不十分だと分かった。

なぜ自己肯定感が低いのかを考えた時、その子どもたちは共通して授業で困っている場面が多いことに気がついた。子どもにとって授業とは、学校生活の大部分を占める時間である。その授業の中で「できない」「わからない」と感じてしまうことが多く、自己肯定感の低下を招き、他者と上手く関わらずトラブルになってしまうなど学校生活に影響が出ていると考えた。

このように、授業の時間が子どもに与える影響は大きく、授業の時間を活用して学級経営に関わる指導を行っていく意識が教師には必要となってくると考える。

またその子たち以外の子も、普段は元気良く遊んでいるのに、大勢の前に出る場面になった時、発言を嫌がったり、新しいことを始めるのを渋ったりするなど、自信が持てていない場面を多く見かけた。そこで、子どもの自己肯定感を高める指導を意識することで、より多くの子どもが安心して過ごし、成長し合う学級を運営できると考える。

このような連携協力校の実態から、授業の時間で子どもの自己肯定感を高めていくことで、学級で安心し

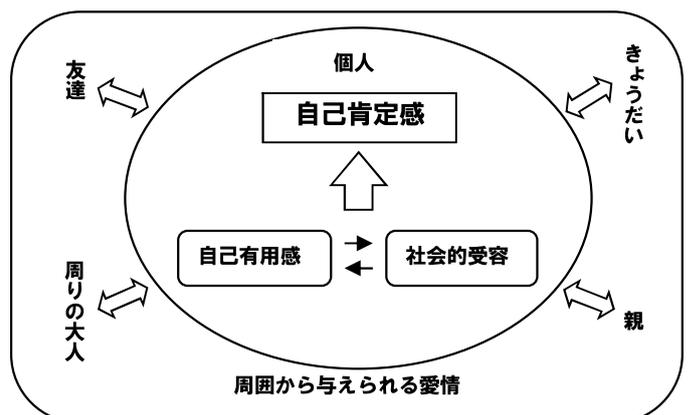
て過ごし成長し合う子どもの姿を目指して実践に取り組んでいく。

2 研究実践の構想と方法

(1) 自己肯定感の定義

自己肯定感に関して、田中(2011)は「自己に対して前向きで、好ましく思うような態度や感情」と定義している。自己肯定感とは、自分が何らかの能力をもっている時にだけ生まれるわけではない。できる自分もできない自分も受け入れた上で、自らを好ましく感じることでできる心が、より好ましい自己肯定感であると理解した。さらに、自己肯定感はどのような要因が関わり合って育まれるかについて、眞榮城(2012)は以下のように考察している。『自己肯定感の構造の土台となるものは、子どもたちにとって重要な他者から与えられる無条件な愛情であり(愛情を与えられるばかりではなく、子どもたち自身がその愛情を認識できていることが重要)、その土台の上に「自分には能力がある」という自己の能力に対する肯定的な感情が育まれ、自己肯定感の栄養素として働いているものと考えられる。自分が愛されており、他者から受け入れられているという感覚は「社会的受容感」、自分には能力があると思える感覚は「自己有用感」と呼ばれており、両者が相互に影響を及ぼし合うことは言うまでもない。』しかし「社会的受容」「自己有用感」のどちらか一方を重視して自己の優越性に固執してしまうと、挫折した時自己肯定感自己否定感に変化しやすい。高垣(2004)は、この時「思考錯誤をして何かを達成する経験」「失敗しても許される経験」等、他者との関わりの中で経験をもつと、子どもの価値観が変化し、安定した自己肯定感を育てることができると述べている。

図1 自己肯定感が育まれる構造



(2) 研究の仮説

実習において、道徳と算数の授業実践を通して「授業の中で子どもの自己肯定感を高める」という課題を追究していくこととした。そこで、以下の2つの仮説を設定した。

<仮説1>

子どもの自己肯定感の実態に即した道徳の時間を単元として構成することで、自己肯定感を効果的に高めることができるだろう。

<仮説2>

算数の実践を通して全員がわかる授業づくりを行い実践することで、子どもの自己肯定感が向上し自己肯定感を高めることができるだろう。

(3) 研究の手立て

研究の仮説に基に、具体的な研究の手立てを挙げる。

<手立て1> 子どもの自己肯定感の実態に即した道徳の単元を作成

道徳の時間を活用して、自己肯定感を高めることを目標とした授業を設ける。文部科学省は、『小学校学習指導要領 道徳編』の中で、学校における道徳教育の意義に、「人間としてよりよく生きる」ことを挙げている。子どもの自己肯定感を育み、年齢とともに発達させていくことはよりよく生きるために欠かせないことである。また、道徳の主題を見ても「個性の伸長」「家族愛」など自己肯定感に関わる主題がある。このため、道徳の時間を活用すれば、子どもの自己肯定感を段階的に発達させるための時間を確保することができると考えられる。

まずはアンケートを実施し、学級の子どもの自己肯定感の実態を把握する。そして、自己肯定感を高めるためには、自己有用感・社会的受容のどちらにアプローチすればよいかを考察する。そして、道徳の時間の単元を作成して子どもの自己肯定感を段階的に高める取組を行う。

<手立て2> 全員がわかる授業を目指した授業構成・指導技術を考える

手立て2では教科の時間を活用して自己有用感を向上させ、自己肯定感を高める手立てを提案する。

子どもが授業中に「わかった」「できた」と実感し、自己有用感を高める機会は、日常の教科の授業で作りに出すことが可能である。子どもが授業中に「わかった」「できた」と実感するためには、子ども全員がわかる授業を行っていかなければならない。全員がわかる授業をつくるためにどのような取組を行うことが効果的であるか、研究実践を通して考えていく。

本研究では、算数の教科を活用して自己肯定感を高める研究を行う。算数は、答えが数字ででてきて、子どもにとって自分ができたのかどうか、わかりやすいためである。今回は全員にわかる授業を目指す取組を、授業をつくる段階と授業を行う段階で考え実践する。その中でも、特に算数日記を活用した授業づくりを主として取り上げる。授業づくりの段階で、子どもが算数日記に書いてほしい内容を明らかにしておく。そうすれば、教師の中でもその1時間で子どもに学ばせたい内容を明確にすることができる。学ばせたい内容を目標とおき、授業づくりを行うことで、よりわかる授業づくりが実践できる。その他の取組と併せつつ、わかる授業づくりに取り組んでいく。

(4) 連携協力校の子どもの実態と目指す姿

連携協力校の子どもの自己肯定感の実態を把握するために、それに迫るアンケートを行った。以下の表は、実習前に行ったアンケートの結果である。質問Ⅰ、Ⅱは社会的受容について尋ねており、質問Ⅲ、Ⅳは自己有用感について尋ねている。

表1 『ここらについてのアンケート』調査

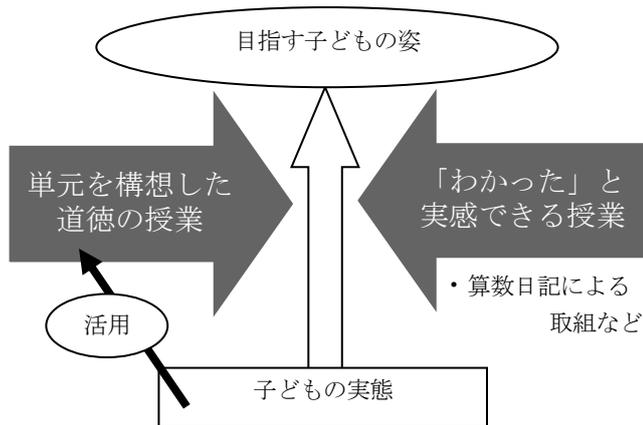
- ①：とてもあてはまる ②：どちらかといえばあてはまる
③：どちらかといえばあてはまらない
④：まったくあてはまらない (文部科学省)

	質問	①	②	③	④
I	私なんかいない方がいいと思う	2	5	9	21
II	だれも私を大切にしてくれないと思う	3	3	9	22
III	周りが自分をどう思っているか気になる	24	6	4	4
IV	自分はだれの役にも立たないと思う	6	6	8	17

アンケートから、自分を大切に思ってくれる存在を実感している子どもが全体的に多いことがわかる。しかし気になるのは、Ⅰ、Ⅱの質問に対して「とてもあてはまる」と答え、社会的受容を認識することができない子どもがいることである。周囲との関わりを振り返り、愛情を与えられていること、受容されていることに気づかせる取組が必要であると考え。またⅢ、Ⅳの結果から自己有用感が低く、自分に自信の持てない子どもが存在することがわかる。特にⅢでは全体の75%がとてもあてはまると答えている。自分を見つめ直す時間をつくり、自分を愛する力を育むことが必要であると考え。以上から実践では、自身を振り返り自分の良さを見つめ直す取組、周囲からの愛情を認識する取組を中心に自己肯定感を高めることを目指す。

(5) 研究構想図

図2 研究構想図

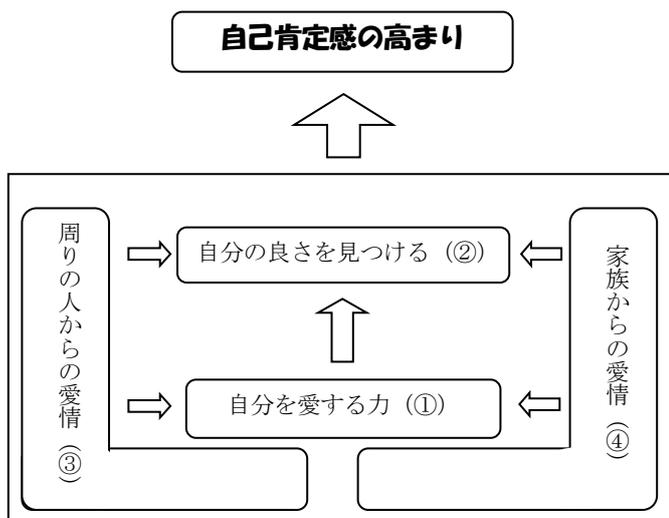


3 道徳の研究実践と考察

(1) 道徳の単元構想

道徳の時間を活用して子どもの自己肯定感を高めていくために、以下の単元構想を考えた。

図3 道徳の単元構想図



時間	授業名	授業の目標
①	自分のことが好きですか？	自分の長所・短所を受容して 自分を愛する力をのばす
②	片岡球子さんの絵	個性を大切に努力する力を のばす
③	倉橋さんの 登下校ボランティア	身近な人からの愛情に気づく
④	たったひとつのたからもの	家族からの愛情に気づく

表1の「こころのアンケート」調査より、連携協力校の子どもは、約75%が自己有用感をもつことができていなかった。これは、他人と比べて自分ができる、

できない、にこだわる小学校低学年の自己肯定感から成長していない子どもが多く、自分の良い所、悪い所を振り返ることができていないために、自分に自信が持てないのである。そこでまず、1, 2時間目では自分を愛する力・自分の良さを見つける力を主題に置いて授業を行う。自分のできないことを受け入れた上で、自分を愛する生き方や、他人の言葉を気にせずに個性を高めていった人の生き方を学ぶことで、他人と比較するのではなく、自らの良い所・悪い所を受容して、自分を好ましく感じる力を育てていきたい。

また、少数ながら周りからの愛情を認識できずにいる子どもがいることもアンケートからわかった。3, 4時間目は周囲の大人と家族に自分は愛されていることを実感できる授業を行って、周囲からの愛情に気づかせていこうと考えた。

上記のように、「自らを振り返り、良さに気づく」と、「周りからの愛情に気づく」ことに単元の中で取り組むことで、他人と自分を比較して得る自己肯定感から、自分を受容する自己肯定感へと子どもの自己肯定感を高めていく。

(2) <仮説1>道徳の授業実践とその成果

以下、道徳の授業実践の内容とその成果・課題をまとめる。

【1時間目】 「自分のことが好きですか？」

(乙武洋匡さん)

自己肯定感を高める工夫

<書かれた自伝・本を教材化>

この授業では「自分を愛する力」を育てることを目標として、連携協力校では、自分に自信をもつことができず自己肯定感が低くなっている子どもが多い。そこでまず、「できないことがあっても悪い事じゃない。」と思い、できない自分も愛すべき存在であることを学べる教材として、『五体不満足』の乙武洋匡さんを取り上げた。生まれつき手足がなくできないことが多くても、笑顔で毎日楽しく生活している乙武さんの生き方を学ぶことで、「できないことがあっても、考え方で変わる」ことを感じることもできると考えた。また、子どもたちが乙武さんの気持ちになって考えやすいよう、『五体不満足』の中でも乙武さんの小学校時代を取り上げて授業づくりを行った。

<教材の提示の工夫>

子どもが授業の中で取り上げた人物に興味をもてるよう、乙武さんの紹介の仕方を工夫した。子どもは初め、肩から下を紙で隠した状態の写真で乙武さんを見て、「笑顔」「楽しそう」という印象をもった。その後紙を段々と下ろしていくことで、乙武さんに手足がないことに気づいた。手足がないが、笑顔で写真に写

っている乙武さんのことを不思議に思い、もっと知りたいと興味をもつことができた。道徳の授業は、教材に興味・関心をもてないと、どんなに価値ある内容を学んでも響かない。教材に対して「知りたい」「不思議だ」と興味・関心を高めることが大切である。教材の掲示の仕方を考えることで、子どもの教材への意識は大きく変わることが実践から学べた。

授業の成果と課題

1時間目の実践は、今後の授業づくりの改善点が多く見られる実践となった。

この授業を行い、ねらいである自分を愛する力は子どもの中に育たなかった。それは、ねらいを考えるためにふさわしい発問ができていなかったためである。授業の中で「乙武さんはどうして楽しく過ごすことができたのだろうか」という主発問を設定していた。しかし、この発問では障がい者と健常者が共に楽しく過ごすための工夫を深めることになってしまい、ねらいとずれてしまった。目標にあった主発問を考えられるようにならなければいけないという、授業づくりの課題が見つかった。

また、この授業は教師が乙武さんについて説明する時間が長く、子どもの発言する時間が少なかった。子どもの中で自分を愛することについて深まることがなく終わってしまった。子どもが自分の意見を書く時間を設けること、教師が発言に対して切り返しを行うことで意見を深めることも、今後の実践で改善しなければならないという課題が出てきた。

【2時間目】「片岡球子さんの絵」

(片岡球子さん)

自己肯定感を高める工夫

<他の先生の実践集を基に教材化>

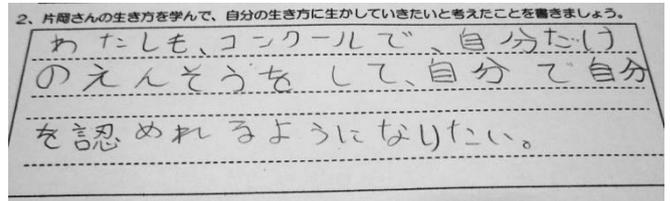
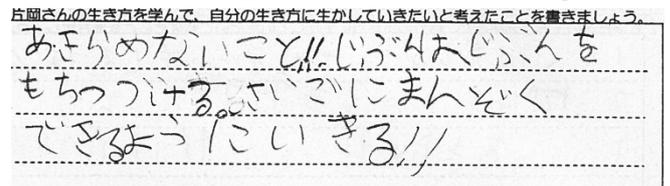
若い頃に画家を志して絵を描き続けたものの、ゲテモノと呼ばれ、画風を批判され続けた片岡さんを教材として取り上げた。これは、先行事例集の『とっておきの道徳授業』で紹介されている実践である。自分の好きなものを大切に努力し、結果が実った人物の生き方を学ぶことで、子どもが自分のことを振り返るきっかけを作れるのではと考え、教材に取り上げた。

授業の成果と課題

授業の最後に「片岡さんの生き方を学んで、自分の生き方に生かしていきたいと考えたことを、書きましょう」と感想を書く時間を設けた。子どもたちの感想を見てみると、自分の習い事や好きなことといったように自分ができていることを振り返ることができていた。また、できることを周りに認められたい、自分が満足できるようにしたいという思いを改めて感じ、困難に感じた時でもあきらめずに、自分の良さを伸ばしてい

くことへの意欲をもつことができたと考える。

写真1、2 「片岡さんの生き方を学んで、自分の生き方に生かしていきたいと考えたこと」より



しかし全員が、自分の良さ・個性を高めることに意欲をもてたわけではなかったことが、課題である。100歳を過ぎた老人である片岡さんの生き方を、子どもが同じ立場となって考えるのは、難しい事であったと考える。あまりに子ども自身とかけ離れている人物を教材とすることは、子どもに「経験」を追体験させるのが難しくなることに気づいた。教材として取り上げる人物を選ぶ時、子どもの身近な存在や、子どもに近い年頃の出来事を扱っていく工夫がいる。

【3時間目】「倉橋さんの登下校ボランティア」

(地域の人・倉橋さん)

自己肯定感を高める工夫

<子どもの身近な人物を教材化>

子どもは周りの大人から愛情を受ける存在であり、大切にされている。家族だけでなく身の回りの大人からも同じように大切にされている。そのことに気づくことができれば子どもは安心感をもち、自分なんて…と自らを卑下することもなくなると考えた。そこで、周りからのいつも愛情を受けていることを振り返り、実感するために、子どもがいつも会っている人物を取り上げることを思い付き、登下校ボランティアの倉橋さんを取り上げた。

<インタビュー音声の使用>

登下校ボランティアの苦労や楽しさを事前にインタビューした音声を流すことで、自分のためにがんばっている姿を実感し、愛情を感じられるよう工夫した。

<授業後も愛情を実感できる工夫>

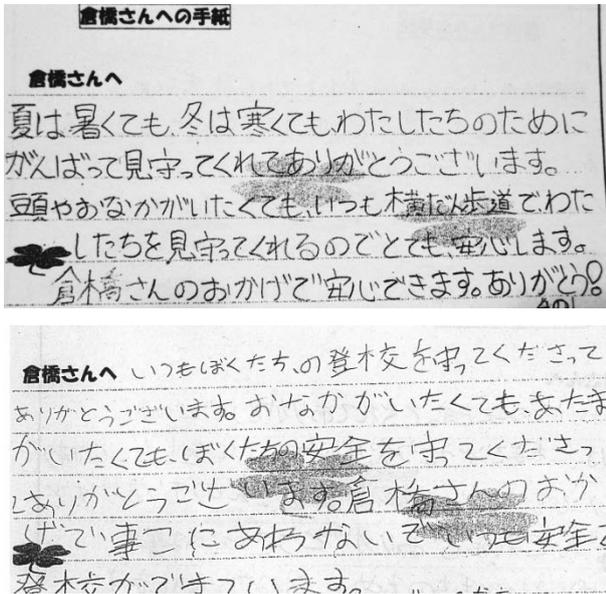
最後に一人ひとり倉橋さんに手紙を書き、授業後に倉橋さんに届けることで、日常的に愛情を実感できるきっかけづくりを行った。

授業の成果と課題

授業の最後に「倉橋さんに手紙を書こう」で子ども

が書いた手紙を見てみると、子どもの中で倉橋さんに対する、感謝の気持ちが生まれていることが分かる。

写真 3, 4 「倉橋さんへの手紙」より



また授業後に、この手紙を直接倉橋さんに届けに行った子どももおり、授業の中だけでなく顔を合わせて話したことで、より周囲の人の愛情を感じることができたのではないかと考える。

この実践では、全員が登下校ボランティアをしてもらっていることに対する、感謝の気持ちを手紙に表していた。授業の最後に、子どもの中で何が変わったかを引き出す活動では、子どもの正直な気持ちを出しやすい発問を考えなければいけない。顔を知っている身近な人へ手紙を書く活動は、気持ちを表しやすい方法であることが分かった。

**【4 時間目】「たったひとつのたからもの」
(加藤秋雪くん)**

＜加藤秋雪くんを取り上げた視点＞
家族愛を主題とした時、子どもが家族に愛されていることの幸せに改めて気付き、親の愛情に感動させたいと考えた。子どもを感動させる教材とは、教師である自分も感動したものでないといけないと思い、以前 CM で有名になった加藤秋雪くんを取り上げようとした。教材からは、秋雪くんの家族が秋雪くんのささいな成長に幸せを感じ、日々の苦労を厭わず愛情を注ぐ姿から、親の見返りを求めない愛情に気づくことができる。そして、自分の家族を振り返ることで、自分の親も同じように愛情をそそいでくれていることに気づくことができる考えた。授業では、写真や CM など視覚教材を掲示して発問することで興味を引き出したり、幸せな様子を読み取らせたりしようと考えた。

授業の概要

○本時の目標

加藤秋雪くんを通して、子どもに向けられる親の愛情を学び、自分も愛されている存在であることに気づくことができる。

○指導過程

学習活動	
1	<p>みんなが生まれた時、家族はどんな気持ちだったのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 感動して泣いた 生まれてくれてよかった
2	<p>加藤秋雪くんってだれだろう。</p> <p>○加藤秋雪くんの写真を見て病気について知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ダウン症=重い病気 余命1年(1年も生きられないかもしれない)と言われた。 してはいけないことがあった。 <ul style="list-style-type: none"> (おんぶ) できない 人込みはさける 虫歯をつくってはいけない (母乳) を直接のませてはいけない </div> <ul style="list-style-type: none"> すごい大変... かわいそう <p>○1年後に無事誕生日を迎えたことを知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 注意した かわいがって育てた 親がしっかり決まりを守ったから
3	<p>秋雪くんのお母さんやお父さんは、どんなふう に秋雪くんとすごしていたのだろう。</p> <p>○写真を見ながら、海へ行ったこと、山にも行ったこと、歩けるようになったこと、等を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ちゃんと生きてる 大丈夫? インフルエンザにかかって大変... <p>○秋雪くんのお母さん、お父さんはどんな気持ちで秋雪くんを育てていたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> できるだけ長く生きられるように育てたい 大変だけどがんばって育てたい 成長を見て楽しい事もある <p>○秋雪くんが6年2か月で亡くなったことを知り、お母さんの撮った写真を基に作られたCM映像を見る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 見たいー ...死んじゃったんだね
4	<p>秋雪くんとすごして、お母さんとお父さんが幸せだったのはどうしてだろうか。</p> <p>○どうして幸せだったと言えるのか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 楽しい時間をふやしてくれた 生まれてきて、長生きしてくれてありがとう
5	<p>自分もお母さんやお父さんに大事にされているなあ、と感じるのはどんな時だろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 風邪引いたら、そばにいてくれる時 親に叱られてる時
6	<p>教師の説話を聞く。</p>

自己肯定感を高める工夫

<授業への興味・関心を高める教材提示>

これまで実在の人物を取り上げて授業を行う道徳に慣れた子どもは、「今日はどんな人の話だろう」と教材に対して構えている。そこで、今回は黙ったまま写真を提示した。秋雪くんとその両親が写る写真を見た子どもたちは、写真から情報を受け取ろうと集中する。ここで、多くの子どもはお父さんが今日の話の中心だと予想した。この後、「今日はこの赤ちゃんについて勉強します。」と言われた子どもは、お父さんではないことと、赤ちゃんについてのどんな話があるというのだろう、という興味・関心、疑問をもち授業を受ける姿勢をつくることができた。

<予想と事実の違いをぶつける>

授業の展開部で、子どもは秋雪くんの病気を知り、子育ての大変さを学んで、秋雪くんに育てるのは「とても大変」だと予想する。しかし、その後秋雪くんと両親の写真から、両親が大変なのに楽しそうに笑顔である事実疑問をもった。予想と事実がちがった場合、子どもはなぜ違うのか考えようとする。授業の中で、予想と事実の違いが出る場面を取り入れると、発問を一生懸命考える子どもの姿を引き出した。そして、苦勞を厭わない親の愛情に気づくこともできた。

<親の愛情をふり返らせる>

最後の発問で、「親に愛されていると感じるのはどんな時ですか」と発問した。これによって、当たり前にしてもらっている行為一つ一つに、愛情が込められていることに気づくことができ、親の愛情をより強く感じるようになっていた。また、友達の意見を聞くことで、親に対して愛情を感じる視点が増え、親からの愛情を実感しやすくなっていた。

授業の成果と課題

自分が親から大切にされているな、と思う時を考える発問で、教師の予想としては「みんなで旅行に行く時」「いってらっしゃい、やおかえりを言われる時」など日常の当たり前の行動を発言するのではと予想していた。しかし、子どもたちから「勉強しろと言われる時」「悪いことやって叱られる時」という発言が出た。「その時は嫌な気持ちになるけど、自分のために叱ってくれていると思うから」という意見を学級に広め、愛されていると実感できる視点を、子どもの中に増やすことができた。子どもの発言で教師の予想以上に子どもの中の「親の愛情」が深まった授業であった。

課題では、今回の授業では秋雪くんの目線ではなく秋雪くんの両親の目線での発問ばかりしていた。そのため、秋雪くんへの両親が、どうして大変な子育ての中でも幸せだと考えることができたかを深めることが、

不十分であったと考える。子どもがより考えを深めるためには、秋雪くん目線での発問が必要だった。

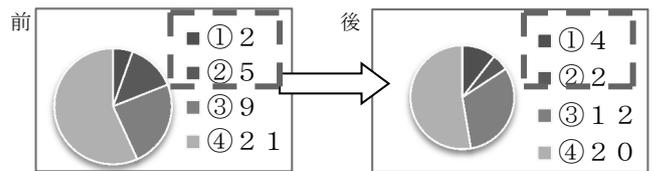
(3) 考察

道徳の研究実践の前後で、子どもたちの自己肯定感がどのように変化したかを考察した。

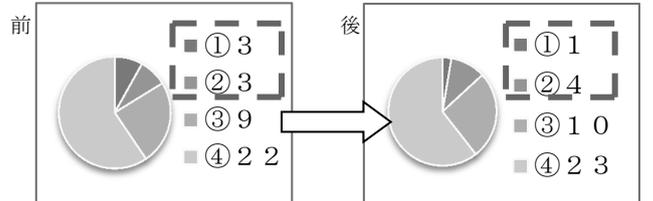
表2 『こころのアンケート』調査(2回目)

- ①: とてもあてはまる ②: どちらかといえばあてはまる
③: どちらかといえばあてはまらない
④: まったくあてはまらない (文部科学省)

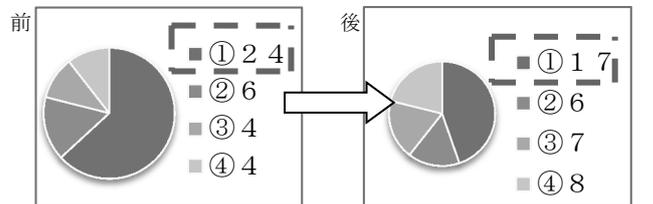
I、私なんかいない方がいいと思う



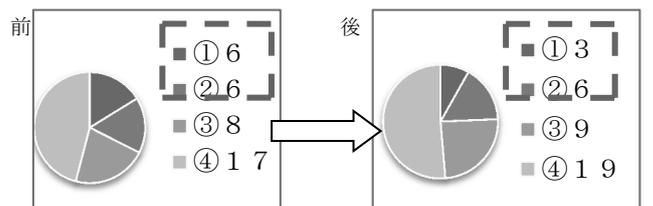
II、だれも私を大切にしてくれないと思う



III、周りが自分をどう思っているか気になる



IV、自分はだれの役にも立たないと思う



アンケートから、どの項目でも小さいが数字の変化が見られた。社会的受容を尋ねるI、IIでは、①②のあてはまると答えた子どもの数が合計では減少した。しかし、Iの「①とてもあてはまる」と答えた人数が実践前後で増えてしまっていた。そのため、社会的受容に対して子どもの意識が大きく変わったとは言えない。一方、自己有用感を尋ねるIII、IVは、実践の前後で「①とてもあてはまる」と答えた子どもの数が減っている。今回の実践では特に、自分の良さや、できることを振り返ったりする視点を、子どもに与えたことで、自己肯定感を高めることができた。

4 <仮説2>算数の研究実践と考察

(1) 研究の手立て

<仮説2>

算数の実践を通して全員がわかる授業づくりを行い実践することで、子どもの自己肯定感が向上し自己肯定感を高めることができるだろう。

仮説2では、教科の授業の中で子どもの自己肯定感をどう高めるかを追究していく。自己肯定感を高めることを主目標として教科の授業を行うことは難しい。しかし、授業の中で子どもが「わかった」「できた」という実感を、多くもつことができれば自己肯定感の向上に繋がると考えた。そこで、全員がわかる授業づくりを追究することと、子どもが「わかった」と実感できる機会を増やし、自己肯定感が高まるか考察する。

仮説2に挙げた算数日記を中心に、他にも授業づくり、授業実践中に自己肯定感に迫る手立てを4つ挙げて、全員が分かる授業づくりを目指す。

①教科書研究

授業づくりを行う時、最初に教科書研究を行い教科書の内容を読み取る。教科書の中で使われている文章・写真・資料などの意味を分析して、どのように授業に活用するか考えることで、授業づくりに生かしていく。

②算数日記の評価基準の設定

算数の実践では、毎時間授業の最後に算数日記を書き、その内容で成績評価を行った。授業づくりの段階で、算数日記にどんな内容を書くことができればどんな成績になるかという評価基準を設定した。そうすることで、授業の中で子どもに学ばせたい点が明確になり、授業づくりに生かせると考えた。

③掲示物の吟味

授業の中で掲示物を活用し、目で見たり、実物を操作したりすることで、授業の内容をより理解できるのではないかと考えた。そこで、授業の中で、掲示物をどのタイミングで出しどのように扱うかを吟味して活用することが大切だと考えた。

④子どもの言葉で理解を深める

授業の中で新しいことを学ぶ時、教師が説明する時間を多くするのではなく、子どもが説明する時間を多く取ることを意識した。教師が説明するよりも、子ども同士で詳しく説明し合う中で、「わかった」と感じる機会が増えるのではないかと考えた。

⑤〇つけ法の実践

子どもが問題を自力解決する時に、教室を回って子ども一人一人に〇つけを行っていく。そうすることで、授業で新しく学んだことに対して「わかった」「できた」と感じるができることとされた。また、子どもが授業を理解しているか把握し、その後の授業にも生かしていく。

以上の手立てを用いて研究実践を行い、最後に算数日記やアンケートの結果から考察を行う。

(2) 研究実践の単元構想と各授業の評価基準

研究実践で取り扱った単元は、「小4算数 面積」(10時間完了)である。各授業での算数日記の評価基準も併せて記載し、その評価基準に則って成績評価を行った。2つの文のうち同じ内容の文が、「2つとも書けていればA」「1つ書けていればB」「書けていなければC」という成績評価を行った。

表3 「算数の単元構想と算数日記の評価基準」

単元名 第4学年 算数「面積」(10時間完了)

時間	学習内容	算数日記の評価基準
1	・広さ比べを通して面積の比べ方に関心をもつ。 ・広さを数量化して比べることに気づく。	○長さがわかっていても、広さは比べられなくてこまった。 ○同じ大きさのもので比べれば、広い・せまいがわかる。
2	・面積の概念と面積の単位 cm^2 を知る。 ・ 1cm^2 を用いて作図したり広さを表したりする。	○ 1cm^2 は一辺が 1cm の正方形の面積であることがわかった。 ○ 1cm^2 がいくつ分か数えれば面積を求めることができる。
3	・長方形と正方形を求める公式を理解する。	○面積の公式は、正方形＝一辺×一辺で長方形＝たて×横。 ○ 1cm^2 がいくつ分かをたてと横でそれぞれ出してかける。
4	・面積の公式を用いて、図形の面積を求める。	○長方形はたて×横、正方形は一辺×一辺で求めるとわかった。 ○ 1cm^2 がたてにいくつ、横にいくつあるかを考える。
5	・新たな単位 m^2 を学び、 m^2 を使って面積を求める。 ・ m^2 と cm^2 の単位間の関係を理解する。	○ 1m^2 は、一辺が 1m の正方形の面積であることがわかった。 ○ $1\text{m} \times 1\text{m} = 100\text{cm} \times 100\text{cm}$ なので $1\text{m}^2 = 10000\text{cm}^2$ である。
6	・ 1m^2 の大きさを作ったり、そのいくつ分で身の回りのものの大きさを測ったりして、 1m^2 の量感を養う。	○ 1cm^2 と 1m^2 では大きさがぜんぜんちがうのでおどろいた。 ○つくえを4つ合わせる(具体物)と、だいたい 1m^2 だった。
7	・複合図形の面積の求め方を考える。	○でこぼこの図形が出たら、まずは線を引いて長方形をつくる。 ○足したり引いたりすると、でこぼこな図形も面積が出せる。
8		
9	・新たな単位 km^2 を学び、公式を使って面積を求める。 ・ km^2 と m^2 の単位間の関係を理解する。	○ 1km^2 とは、一辺が 1km の正方形の面積であるとわかった。 ○ $1\text{km} \times 1\text{km} = 1000\text{m} \times 1000\text{m}$ なので、 $1\text{km}^2 = 1000000\text{m}^2$
10	・新たな単位 a 、 ha を学び、公式を使って面積を求める。 ・これまでの単位を比較し、広さに対しての量感をもつ。	○ $1\text{a} = 10\text{m} \times 10\text{m}$ で 100m^2 、 $1\text{ha} = 100\text{m} \times 100\text{m}$ で 10000m^2 ○単位の大きさは、 $\text{cm}^2 < \text{m}^2 < \text{a} < \text{ha} < \text{km}^2$

(3) 授業実践の成果

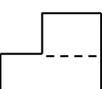
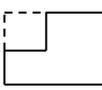
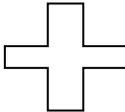
授業づくり・授業実践時の手立てによって、研究実践でどのような成果が得られたかを、7・8時間目の実践を取り上げて報告する。

単元 算数小4 「面積 2 面積の求め方と工夫」

○本時の目標

- ・長方形、正方形の面積の公式が活用できるように、意欲的に図形を操作したり、計算を考えたりすることができる。
- ・複合図形を長方形や正方形に分けて面積を考えれば、複合図形の面積を求められることを理解することができる。

○指導過程 (2 時間分を 1 つにまとめたもの)

学習活動	
1	前時の復習を行う。
2	問題の複合図形がどんな形の図形か考える。  <ul style="list-style-type: none"> ・ながぐつ形の形 ・階段みたい
3	<p>長方形・正方形でない図形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>全体で面積の求め方を考える。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・図形を切る。たてに線を引く。 ・長方形をつかって計算する。 ・それぞれの面積を求めて足す。 <p>各自で問題を自力解決する。</p>
4	<p>面積の求め方を言葉で説明してみよう。</p> <p>一人ひとりワークシートに説明を書いてから、全体で確認をする。</p> <p>最初に線を引いて長方形・正方形をつくり、それぞれを計算してから足すと面積が出る。</p>
5	<p>ほかの求め方を考えてみよう。</p> <p>各自で考えてから、全体で発表し合う。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・横に線を引く。 ・長方形を 2 つつくる。 ・それぞれの面積を求めて足す。  <ul style="list-style-type: none"> ・線をつけくわえる。 ・長方形を 2 つつくる。 ・大きい長方形から小さい長方形を引く。
6	<p>教科書の問題を自力解決する。</p> <p>それぞれの問題を自力解決した後、全体でどんな求め方があったか発表する。</p> <p>(1)  (2) </p>
7	<p>算数日記を書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長方形、正方形でない形が出てきても、長方形や正方形をつくれば大丈夫なことがわかった。 ・線を引いて長方形や正方形をつくり、足したり引いたりすれば面積を求めることができる。

①教科書研究

教科書研究を行い、まずこの時間は既習事項である面積の公式を用いて長方形・正方形ではない複合図形をどのように解くか、を学ぶ応用的な授業であることを読み取った。授業のはじめに長方形・正方形とは違う図形が出てきたことを印象付けることで、子どもの中に疑問を引き出すことが大切である。そこで、複合図形を提示する時に「今日の図形は、今まで見てきたのとは一味違うんだな。」と前置きして提示し、子どもの興味を引き付けた。さらに、「どんな形の図形に見えるか」と発問することで、長方形・正方形ではないことを印象付けることができた。

また、今回の目標は、一人ひとりが「複合図形の求め方を考え、理解することができる」ことであるので、授業の中で問題を解く時間を多く取る必要があると考えた。そこで、図形が書きこまれているワークシートを配布し授業を行ったり、本来 1 時間で完了する範囲を、時間を増やして 2 時間授業したりすることで問題を解く時間を確保した。

②算数日記の評価基準の設定

算数日記の評価基準を設定したことで、本時の授業で重要な場面や子どもに残したいキーワードを明確にすることができた。本時では、「線を引く」「長方形・正方形をつくる」「足す、引く」というキーワードを子どもに残すことで、複合図形の解き方を定着させることができた。そこで、子どもからそれらのキーワードが発言された時は板書に残すことを心がけた。板書に残っていると、子どもが問題を解いたり説明したりする時の手がかかりとなって、解き方の定着を促していた。

③掲示物の吟味

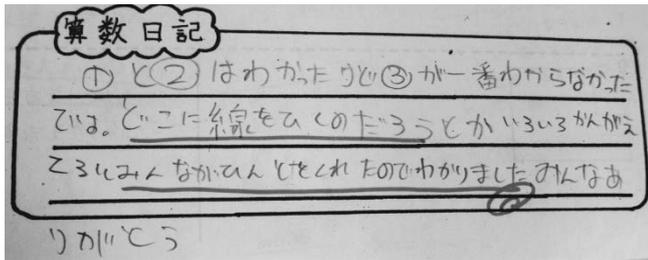
子どもにとって、図形を切り離したりくっつけたりする操作は図形に線を引くだけでは想像しにくかったり、説明しづらかったりする。そこで、画用紙で問題と同じ図形を用意し、実際にハサミで切って操作を視覚化して考えることでより解き方が分かりやすくなるのではないかと考えた。また、解き方が複数通りあることからそれぞれの解き方を視覚化できるように、同じ図形を数枚用意した。実物を切ったり動かしたりすることで、頭の中で図形を 2 つに分けるイメージを子どもがもてるようになった。

④子どもの言葉で理解を深める

授業の中で複合図形「線を引く」「長方形・正方形をつくる」「足す」「引く」というキーワードを子どもが発言した際、「どこに引くの?」「足すとどうなるの?」と切り返しを行い、より詳しい発言を引き出した。そうすることで、発言を聞いているわからない子や、わかったつもりになっている子も「確かに。」と新たな学

びを見つけることができる。また、算数日記の中で、

写真5 「8時間目の算数日記」より



と書いている子もいた。子どもに説明させたり、切り返しを行ったりして、周りの子どもの理解も深まっていくことが分かった。

⑤〇つけ法の実践

全体場で図形の解き方を考えた後、個別に面積を求めた。その時〇つけ法を実践し、解けている子どもには「ばっちりだね」と一言かけて〇をうち、困っている子どもには「黒板にはなんて書いてある？」と手がかりを与えた。多くの子どもが〇をもらい、自信をもってその後の授業に取り組めた。

(4) 考察

＜わかる授業が実践できたか＞

実践後に算数日記を評価したその結果から、研究実践の授業が子どもたちにとってわかる授業であったのか考察していく。

1, 2時間目の算数日記では「面積は難しいけれど楽しいです。」や「面積はすごく面白い。」など分かったことでなく授業の感想を書いている子どもが多かった。そのため、成績評価もCの子どもが多かった。しかし9, 10時間目の算数日記を見てみると、「今日勉強したのは1km²です。1km²は一辺が1kmの正方形の面積のこともわかりました。」「cm²の次にm²があり、m²の次にkm²があることがわかった。」など、授業の中で分かったことを書く子が増えてきた。

表3 「算数日記の成績評価の変化」

	A	B	C
1時間目	11	5	17
2時間目	4	7	24
9時間目	7	21	8
10時間目	2	21	15

1, 2時間目は学級の半数がC評価であったのに対し、9, 10時間目は学級の半数がB評価に変化した。この変化から、5つの取組によって、全員がわかる授業づくりに近づくことができた。一方で、A評価の子

どもが減ってしまった点、C評価も未だ多い点も挙げられる。

結果として、5つの取組は少ないながら成果はあったものの、全員がわかる授業の実践は力不足であった。A評価が増えていくにはどのような取組が必要か、これまでの取組の改善点は何かを考えていく必要がある。

＜「わかった」「できた」を実感できたか＞

実践を通して、ある子の算数日記の変化を追う。算数日記で変化を見た子どもはNさんである。Nさんは『こころのアンケート』の調査で普段自己有用感を感じられていないことがわかっている。また、授業中を見ると、友達に話しかけてノートが書けない、周りと一緒に問題を解くとできるが自力解決では問題を正解することが難しい、など理解が遅い様子である。

単元の導入である1時間目の算数日記でNさんは算数日記に以下のように書いている。

とてもかんたんだったしおもしろかった

授業の学びには直接関係のない感想が書いてあった。また、おもしろかったと書いているが何が面白かったかという具体的な事柄も書いていない。1時間目の授業では、Nさんに「わかった」という実感をもたせることはできなかった。

しかし、5時間目では学んだことが書かれていた。

1m²は10000cm²になることが分かった。

続いて10時間目の算数日記では、さらにどうしてそうなるのかにまで言及して、わかった事柄を書いていた。

1アールは10×10で100になるから1aは100m²になる。
1ヘクタールは100×100で10000になるから1haは10000m²になる。

このように授業が進むにつれて、Nさんが授業の学びを、詳しく書くことができるようになっていく。Nさんが授業の中で学びを見つけ「わかった」と実感したことで自己肯定感が高まり、授業態度や算数日記の成績の変化につながっている。わかる授業の実践は不十分であったが、数人の子どもの算数日記にはこのような変化が見られ、一定の成果があった。

5 主題研究の成果と課題

(1) 主題研究の成果

①単元を構成した道徳の実践について

本研究の成果として、「こころのアンケート」調査の結果を用いて子どもたちの自己肯定感を高める要因を把握することで、自己肯定感を効果的に高める単元構想を作成することができたことである。この研究実

践を通して、子どもたちは特に自分の良さやできることを振り返ることで自己有用感に気づくことができた。アンケートでも、子どもたちの自己有用感が高まりつつあるという結果が出た。また、アンケートでは高まりが見られなかった社会的受容であるが、全く変化がなかったわけではない。倉橋さんに対して、書いた手紙を直接渡した子もおり、一部の子に変化が表れていることが子どもの姿から言える。

日常生活の一部であるが、子どもが自己肯定感を高めつつある成果が得られたことから、道徳の時間を活用し単元構想を作成する取組は、自己肯定感を高めるのに有効な手立てであった。

②算数日記の評価基準を定めてからの授業づくりの実践について

算数日記の評価基準を定めてから授業づくりを行う他に、子どもの自己肯定感を高めるための手立てを実践したことで、学級全体ではないが一部の子どもには変化が見られた。それまで「わからない」「できない」と感じ授業を受ける態度が崩れてしまっていた子が、「わかる」と感じたことで前を向いたり大事な所を見つれたりできるようになった。全員がわかる授業を実践するには力不足であるが、自己肯定感の低下を防ぐための手立てを確立できたという意義があった。

また、教師が説明する時間を多く割くよりも、子どもが自分の言葉で説明する時間を多く取り、子ども同士の対話の中で理解を深めると、子どもの学びにより効果的であるという新しい視点を学んだ。授業づくりの時に子どもの対話の時間を意識して活用したい。

(2) 今後の課題

①単元を構成した道徳の実践について

課題の1点目は、自己肯定感の変化が一部の子どもに留まっている点である。自己肯定感が高まった子もいれば、高まらなかった子もいる。これは、授業の中で子ども同士の意見を交流する時間が少なかったためと考える。算数の研究実践の中で考察したように、子どもは教師の話聞くだけの時に比べ、友達の話聞いて理解を深めた方が学びを変えていくことができる。今回の道徳の研究実践は、教師が話している時間が長かったために子どもの学びが大きく変わるという場面は見られなかった。単元構想だけでなく授業の内容も練り、話し合い活動・意見交換を取り入れることで、さらなる自己肯定感の高まりが期待できる。

2点目は、社会的受容の高まりが見えなかったことである。社会的受容を認識できていなかった子どものほとんどが、実践後も認識できていなかった。しかしアンケートの③④あてはまらないという答えを前後で比較してみると、社会的受容を感じている子どもがさらに強く感じるようになっていく。このように少数の子の社会的受容が低いと出ているので、学級全体でなく、

その子自身に向けた授業と学級経営の両面からの取組を行った方が効果的であるかもしれない。

②算数日記の評価基準を定めてからの授業づくりの実践について

まず1つ目の課題に、研究実践後、学級の子どもの中で自己肯定感が高まったか調査した時、全体的に自己肯定感の変化が見られなかったことが挙げられる。これは、「わかった」「できた」を実感させる手立てに取り組んだものの、その実感を共有する取組がなかったためである。授業のはじめや最後に算数日記を振り返る時間をつくり、「わかった」という実感を友達と共有して、子どもの自己肯定感をさらに高めていきたい。

2つ目の課題は、自分の授業技術力の向上が必要であるという点である。今回の実践の中で、子どもが一番「わかった」と実感した場面は、写真5の算数日記のように友達の説明を聞いて理解した時であった。その点で、④子どもの言葉で理解を深めるという手立ては有効であった。切り返しのタイミング、発問等でもっと授業の中で、子ども同士が関わり合うことで理解を深める場面をつくりたかったが、自分の授業技術不足であった。今後、子ども同士が授業に関わり合う時間を授業中に作り出すことを意識して、「わかった」と実感できる機会を増やしていきたい。

6 おわりに

連携協力校でのサポーター活動を通して、自分が目標としている「子どもが安心して過ごし、互いに成長していける学級」をどのような方針で経営していくかという課題を、研究実践を通して深めることができた。学級経営と授業実践は密接に関わっており、2つの側面から子どもを育てていくことが大切であると学んだ。特に、今回追究した自己肯定感を高める授業は、課題の改善に含め、自分の財産として活用していきたい。

【参考文献】

- ・文部科学省『小学校学習指導要領』東京書籍、2008
- ・文部科学省『小学校学習指導要領 算数編』東洋館出版社、2008
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 道徳編』東洋館出版社、2008
- ・乙武洋匡『五体不満足』講談社、2000
- ・加藤浩美『たったひとつのたからもの』文藝春秋、2003
- ・佐藤幸司編『とっておきの道徳授業Ⅷ』東京書籍、2009
- ・志水廣『算数力がつく 教え方ガイドブック』明治図書、2006
- ・高垣忠一郎『生きることと自己肯定感』新日本出版、2004
- ・田中道弘・榎本博明(編者)『自己肯定感』『自己心理学の最先端』あいり出版、2011
- ・眞榮城和美「自己肯定感の心理学 自己肯定感の構造 ―自己肯定感の栄養素と栄養バランスについて考える」『児童心理』金子書房、2012-08, p10-17